

## 審査員特別賞

「私なりの恩返し」

セントヨゼフ女子学園高等学校 3年

米山 帆波

小さな子供が車の窓を叩いて物乞いをする。私にとってそんな光景はテレビの向こう側の自分とは関係のない世界でした。しかし、去年の夏自ら参加した10日間のフィリピン研修の初日、この光景を目のあたりにしました。これからの10日間への期待を胸に、出会ったばかりのホストファミリーと車で移動中の出来事でした。渋滞している車の間を兄弟が二人で一台一台の車の窓を叩いて物乞いをしていました。そして私達の車の窓も叩きにやってきました。が、ホストマザーはお金をあげることなくただ首を振り窓を閉めました。そしてこの子供達のためにもお金をあげてはいけないと教えてくれました。私は、この情景が、テレビの向こう側でなく、自分の目の前に広がっている事が信じられないと共に、その二人の物乞いの子供達があまりにも街の風景になじんでいたことが衝撃的で言葉も出ませんでした。

その数日後、私達はフィリピンの貧しい子供達が通う学校へ行きました。そこで一人のエイプリルという女の子に出会いました。その子から話を聞くと、彼女の姉妹兄弟は家で家の事を手伝っていて、家族で自分一人だけが学校に通わせてもらっていること、家族を助けるために医者になりたいこと、医者になるために一生懸命勉強していることを話してくれました。彼女と話す中で、自分は毎日学校に通える事を当たり前だと思っていて、自分が恵まれた環境にいることにも気付かず、文句ばかり言っていたことがすごく恥ずかしくなり、これからは恵まれた環境で勉強できることに感謝しようと思いました。

また、経済的にも夢を叶えるのは難しいにも関わらず、大きな目を輝かせながら夢を語る彼女の姿に、少しでも手助けがしたいと感じました。しかし、何もしてあげられることが見つからず、もどかしさや悔しさでいっぱいになったあの感情は今でも忘れることができません。

学校での交流の後、彼女達は私達を自分達の住む地区や家を案内してくれるホームヴィジットへ連れていってくれました。その時、私が少し緊張していると、エイプリルが私の手をずっと握りしめながら歌を歌ってくれました。不安だった私に何も言わず、そっと手をつないでくれたあの優しさは、思い出だけで心が温くなる、私にとってエイプリルとの宝物の時間です。

私はこの学校に行く直前まで、この訪問をボランティアの一環と捉えていました。しかし、私はここで一生忘れられない体験をして、自分の価値観が大きく変わり、この訪問をボランティアと捉えていた自分の大きな過ちに気付かされました。

高校生の私には、多額の支援金を送ることも現地に行って活動する事もできません。そんな私にできる唯一の事は、自分が体験し感じた事を忘れずに、たくさんの人達と自分の体験を共有して、より多くの人に世界中の貧しい環境で夢に向かってがんばる子供達に関心を持ってもらうことです。貧困に対する支援には単発的なものではなく、持続的な支援が必要です。持続的な支援のためには多くの人々に関心を持ってもらうことが第一だと思います。私は今まで全校集会やロータリークラブの大きな会合で話をさせて頂く機会をもらったりして小さな一歩を踏み出したところです。私にできることはちいさなこともかもしれません。しかし、私の価値観を変え、忘れられない経験をさせてくれたエイプリル達への恩返しとして、これからも自分の体験を多くの人に伝えていきます。